

人生

寸鉄は人の生殺を握る

ご承知のように「寸鉄」とはコトバのことである。何気ない一言が誤解を生んで取り返しのつかなくなることもある。また、善意の言葉が、悪意となって相手に伝わり、恨みを買うことさえある。言葉とは怖いものであるが、これを使わずに生活することはできない。そこで、慎重な言葉選びや表現が求められるのであるが、原稿のない日常会話では、ついいうっかりということもあり、冗談が通じずに真顔で逆襲されることさえある。

考えてみると言葉は熟慮の上、相手や場面、その場の雰囲気を使い分けなければならないようである。特に日本語は、上下関係で敬語という多様な言い回しがあつて煩雑はんざつなのだが、これを間違えると、非常識という評価が烙印される。言葉はその人の教養であり、社会常識の一端と見なされているからである。政治家が失言によって罷免ひめんされたり、降格させられたりするが、これは、基本的な語彙の貧困さと言葉の持つ意味の重さを認識していない結果で、きわめて初歩的で不注意なミスである。

話を寸鉄に戻そう。比喻に使われる「寸鉄人を殺す」の効果は、相手の弱点を短い警句で押さえ込むことを言うのだが、これは仏国

のエスプリに近いものと思われる。英国にも同じような効果を持つ表現があるが、シェイクスピアの「マクベス」や「ハムレット」の台詞せりふは、まるで寸鉄の応酬である。

ところで、寸鉄とは具体的にどのような言葉を云うのであろうか。思うに相手が反論できない一言である。つまり、本人が努力しても直せないものへの指摘なのである。具体的には、容姿や性質癖への嘲笑がそれに当たる。身体髪膚は、敬愛する両親から受け継いだものである。それへの揶揄やゆは自分への辱めはずかしを越えて両親に対しての侮辱にもなるのである。心の未熟な子供たちのいじめと同根で致命傷になる。

ところで、寸鉄の「負」の例ばかりでは寂しいので、次に寸鉄の効用を挙げたいと思う。実は、寸鉄とは妙薬になることもある。人間は「人間」じんかんという人と人の間で生活している生き物である。そして、人間には意思の疎通の手段として言葉が使われる。人はこの言葉によって救われもし、落ち込んだりもする。病人に対しての医師の不用意な一言の言葉が、励ましか否かは天と地の差となる。絶望の淵にある人への共感の一言、自信を失った人への真心の籠もったことば、など等。列举すれば切りが無い。この妙薬が一層効果を上

げるようにするには、工夫も必要である。薬には処方が必要なのである。良薬は苦いものばかりとは限らない。

この場合の寸鉄は、直接対話でない方が効果があると考えられる。自然体で何気なく第三者に、この人がきつと伝えるであろうことを予測し、本人も気づかない誉れや美点を褒め称え^ほ勇気づける。噂や伝達は、見えない大勢の人の言葉として仄聞^{そくぶん}した本人に、何倍もの新たな勇気を与えるに違いない。一般人の真理として見えない人の言葉には、想像や推測が加わり大きく強い力となる。これは、時に、有益かつ有効な「寸鉄」になると信じて疑いない。寸鉄という一語は、実はそれを使う人の「人格」そのものなのかも知れない。日頃のその人のすべてが結集されたもので無ければ説得力をもたないばかりか、それを使用した故に洞察力のある人に軽蔑されかねない。またしても「論語」で恐縮だが、論語を読み直してみると孔子という人が弟子たちに個々に対して精神分析とも言える洞察力を持ち、弟子によってそれを使い分けていたことが分かる。従って、賞賛される弟子も叱責される弟子もいたのだが、その底流に深い愛情のあったことが読みとれる。

現代でも使われる十五歳の志学、三十歳の而立、四十歳の不惑、

五十歳の知命、六十歳の耳順、七十歳の規矩きくは極めて理に叶っている。今この世に生きている人にもこの精神の成長の区切りは生きている。人生を大きく二分すると、四十歳という年齢が節目となる。要約すると四十歳頃までに自己の確立を計らないと目的は達成しにくいということである。自分の経験から推しても四十を過ぎると、物事をすべて悟ったかのようにものわかりがよくなる。これは一見完成に近い人の態度に見えるが、実は自己諦念と妥協の産物でしかない。ただし、世の中は広く大きい。晩年になって見事な大輪の花を咲かせる人もいる。この花はそれまでの積年の精進に他ならない。寸鉄は誠意を含めて使えば、世の中の雰囲気を変えられるかも知れない。言葉とはそれほどに力と効力を持つものなのである。

話が巧みで話し上手な人を弁舌家とは言わない。訥言とつげんであってもその誠意が長く長く続けることこそが人の心を動かすのである。一時代の英雄「蘇秦そしん」や「張儀ちやうぎ」の弁舌が成功をもたらさなかったのは、その人柄にあったという評価は大方の歴史家の見方である。寸鉄を見事に人を生かすために使い分け、他人には勿論、自分自身にも勇気と使命を与え続けられる人こそ、真の賢者と称えられる人ではないのかと考える。